

ほり こし じ ろう  
**堀越二郎****綿密で粘りこくて緻密な男**  
—世界水準を抜きこんでた航空機の開発—堀越二郎 (1903 ~ 1982)  
写真 : Wikipedia**東京帝大航空学科を首席で卒業**

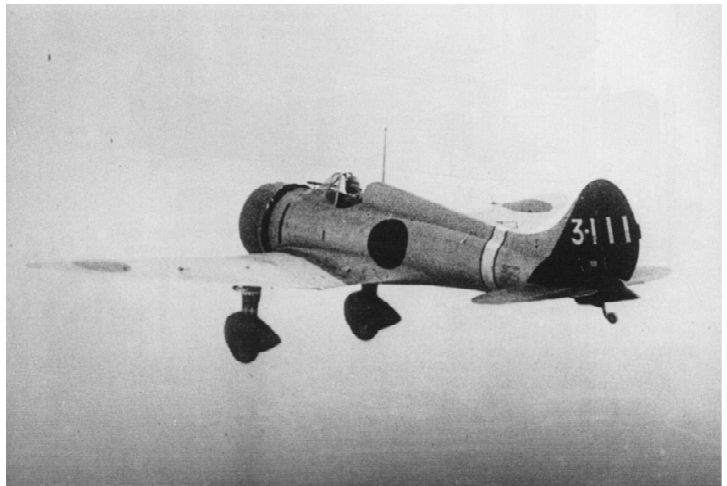
堀越二郎は、1903(明治36)年、群馬県藤岡市に生まれる。藤岡中学校、第一高等学校を経て1924(大正13)年に東京帝国大学工学部航空学科に入学、1927年3月に首席で航空学科を卒業した。同期には木村秀政、土井武夫らがいる。

1927(昭和2)年4月、三菱内燃機製造に入社した。入社後、欧州、米国へ最先端の航空機技術を学ぶ為に、1年半派遣された。

**七試艦戦の設計主任となる**

1932(昭和7)年、海軍は、主要機種国産化を目論む「航空技術自立計画」を立案、各種機体の国産化計画に着手し、「七試計画」を、メーカーに伝達した。この時、堀越は、飛行機の設計全体を統括した経験はなかったが、設計主任に抜擢され、七試艦上戦闘機を設計した。

試作機は、  
試験飛行



堀越二郎設計の名機・九六式艦上戦闘機

出典 : 『世界の傑作機』1991

中に墜落し、不採用となったが、この機体を設計生産したことにより、最新の低翼単葉、片持構造の戦闘機の設計・製造技術に、貴重な資料と経験を得ることができた。

**根掘り越し、葉掘り越し**

1934(昭和9)年には九試単座戦闘機の設計・開発を進め、綿密で粘りこくて緻密で、そのかわり要領はよくないが、ひとつの方針をとことんまで貫く性格から、設計チームの後輩にあたる久保富夫や曾根嘉年ら技術者たちは、堀越を”根掘り越し”、”葉掘り越し”と呼んでいた。機体表面の空力的平滑化(機体全体に沈頭鋏を使用)を追求し、軽量の部材の超ジュラルミン材SDHを採用した機体を完成させた。九試単座戦闘機の設計・開発は、予期以上の成功を収め、海軍は、研究用の外国機購入の契約交渉をすべて中止するほどであった。

堀越苦心の設計になるこの機体は、1935(昭和10)年、海軍初の全金属単葉戦闘機九六式艦上戦闘機として採用された。堀越は、1937(昭和12)年より十二試(零式)艦上戦闘機設計開発に参加、相反する性能要求に応える機体設計をおこない、零戦は誕生し、世界にその勇名をとどろかせた。

技術部第二設計課長として雷電、烈風の設計に携わるが、完成まで関与した機体はない。

堀越は、若いころ米国を見たことから戦争の結末について、「優れた機体を作っても、最終的に日本は負けていただろう」という。それは、合理的に考えて、日本には、米本土を攻撃することはできないからであった。

戦後は、新三菱重工業に勤務し、国産旅客機YS-11の設計に土井武夫、木村秀政らとともに携わった。新三菱重工業を退社した後、大学の講師、教授を歴任した。堀越二郎の死亡記事は、全世界の新聞で報じられた。



堀越二郎設計の名機の生まれた三菱内燃機の大江工場

出典 : 『三菱重工業株式会社社史』